

# 大学教育にやさしい日本語を導入する意義と その効果検証

—短期大学部での教育実践例に基づく一考察—

The Significance and Effectiveness of Introducing “Plain Japanese” in University  
Education: A Study Based on Educational Practice at a Junior College

OTSUKA Misa

大 塚 み さ

日本語コミュニケーション学科教授

YOSHIKAI Akira

吉 開 章

一般社団法人やさしい日本語普及連絡会代表理事

## 抄録：

本稿は大学教育におけるやさしい日本語導入の意義とその効果について、複数の教育実践例をもとに検討した。まず、やさしい日本語の位置づけや国内におけるやさしい日本語の取り組み事例を見た上で、吉開による活動内容とその要点を確認した。そして、本学でのレクチャーやゼミ活動等での教育実践を通して、国際的な学びを専門としていない2年課程の短期大学部の学生が多文化共生への理解を深めたり、自ら情報発信したりできる姿勢を培えることを検証するとともに、今後の課題を確認した。

## Abstract：

This paper examines the significance and effectiveness of incorporating “Plain Japanese” (Yasashii Nihongo) in university education, drawing on various practical examples. First, we reviewed the role of Plain Japanese and its implementation cases in Japan, with a particular focus on Yoshikai's activities and key points. Through educational practices such as lectures and seminar activities at our college, we demonstrated that students in a two-year junior college program, even without a specialization in international studies, could deepen their understanding of multicultural coexistence and develop independent information dissemination skills. Additionally, we identified the future challenges for this educational approach.

キーワード：やさしい日本語 多文化共生 第三者返答 公用語 大学教育

**Keywords** : Plain Japanese, Intercultural Cohesion, Third Person Response, Official Language, University Education

## 1. はじめに

『日本経済新聞』2024年3月19日付朝刊によると、日本で生活する外国人が国想定の1.5倍のペースで増加しており、現在の入国超過数から推計すると2050年代には欧米並みに人口の1割を超える可能性がある。つまり、現在の大学生がキャリアのピークを迎える頃には、多様な国籍の隣人と社会や地域で共生していくことになる。残念ながらこれに関する学生の認知度は高いとは言えないが、学生たちが社会へ巣立つ前には理解と関心を深める機会を設ける必然性を強く感じる。

本稿は、一般社団法人やさしい日本語普及連絡会代表理事で『入門・やさしい日本語』認定者養成講座を主催する吉開と、同講座4期受講生の大塚による共著である。やさしい日本語の位置づけ、吉開が全国で展開する活動に加え、本学で実施した吉開のレクチャー、および大塚による複数の教育実践報告を中心としつつ、それを通して以下の問いの検証も目指すものである。

- (1) 国際的な学びを専門としていない2年課程の短期大学部の学生が、やさしい日本語を通して多文化共生への理解を深めることはどの程度可能か。
- (2) (1)に加えて、さらに学生自身がインフルエンサーとして情報発信できる姿勢を培うためには、そのようなアプローチが有効であるか。

以下、2章においては、やさしい日本語に注目した理由と大学等での実施事例を吉開が中心となって執筆する。3章で大塚が本学での教育実践例を報告し、4章で上記の問いを検討する。

## 2. やさしい日本語の大学教育への導入に注目した理由

### 2.1 やさしい日本語の概略

一般にやさしい日本語とは、日本語の初心者である外国人住民などにも伝わりやすいように、文法や語彙を調整した日本語のことをいう。昨今の緊急災害報道で見られる以下のような言い換え表現が、典型的なやさしい日本語の例である。

速やかに高台に避難してください → 早く高いところに逃げてください

余震に十分注意してください → 後から来る地震に気をつけてください

やさしい日本語の取り組みは、1995年の阪神・淡路大震災で日本人住民よりも外国人住民のほうがケガをしたり亡くなったたりした割合が大きかったという事実への反省から、外国人住民に効果的に災害情報を伝える「減災のための「やさしい日本語」」として、社会言語学を専門とする弘前大学の佐藤和之教授らによって研究が始められた。

また1990年ごろに南米日系人を労働者として日本に呼び寄せる政策が始まると、2000年代には各地で言葉や文化の違いによる問題が起きるようになった。そこで日本語教育を専門とする一橋大学庵功雄教授らの研究グループが、外国人の学ぶ初級日本語を基本とした範囲で、行政機関や公的施設が普段から発信する情報を書き換えていこうという「平時のための〈やさしい日本語〉」の研究に取り組んだ。

本稿執筆者の一人である吉開は日本語教育に関心をもったことから2010年に日本語教育能力検定試験に合格した。そしてFacebook上で自ら主催する大規模日本語学習者支援コミュニティで日本語教師有資格者たちとともに学習者支援ボランティアをしながら、会社の業務でも日本語教育の知見を活用した企画の立ち上げを目指していた。

その中で、日本の地方を訪れるインバウンド観光客は日本語学習熱が高い韓国・台湾・香港など東アジアからのリピーターが多くを占めることに注目し、日本語学習経験のある観光客が日本で日本語を楽しみたいというニーズを「日本語ツーリズム」と命名した。さらにそのようなニーズに対して日本語初心者にもわかりやすい「やさしい日本語」で日本人が接客することで、日本語を楽しみたいという観光客の満足度も、外国語が苦手な受け入れ側の対応力も向上させるという着想を得た。これをまとめて「やさしい日本語ツーリズム」というコンセプトの企画に仕上げ、故郷である福岡県柳川市に提案したところ、同市職員の尽力もあり2016年に政府交付金を得て事業を立ち上げることができた。

同時に「やさしい日本語ツーリズム研究会」を設立し、柳川市内だけでなく日本中の一般市民に向けたやさしい日本語啓発活動を始め、現在に至るまで各地で講演活動をしている。2020年アスク出版から『入門・やさしい日本語』を出版している。

2019年政府は外国人の積極受け入れ政策に転じると、入国管理局から昇格した出入国在留管理庁（入管庁）と文化庁が連携し、外国人への日本語教育の法的整備とともに、外国人住民が自分の理解できる言語で行政サービスを受けるための「多言語対応」における言語の一つとして、やさしい日本語を位置づけた。2020年には、入管庁・文化庁による「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」が公開され、やさしい日本語表現の考え方が示された。

やさしい日本語は様々な領域でも注目され、広がりを見せている。順天堂大学医学部の武田裕子教授は、外国人の患者や家族が増えていることから、医療現場のコミュニケーションにおけるやさしい日本語の重要性に注目し、2020年に「医療 x やさしい日本語研究会」を発足して研究・実践を進めている。

またやさしい日本語は外国人だけでなく、手話が第一言語で日本語は第二言語であるろう者や、知的障害者・高齢者など幅広い人たちへの配慮としても有効と考えられており、福祉関係者にも注目されている。さらに、博物館や図書館など社会教育の分野でもやさしい日本語への取り組みが進められている。2019年に東京の多摩六都科学館が取り組んだやさしい日本語での展示・解説は、東京都美術館や福岡市美術館など様々な施設に広がっている。

## 2.2 大学・高校でのやさしい日本語取り組み事例<sup>i</sup>

一方で、やさしい日本語への関心は大学や高校の教員および学生たちにも広がりつつある。

### 2.2.1 大学での取り組み事例

2020年に出入国在留管理庁（入管庁）が発足した『「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」に関する有識者会議』の座長を務めた明治大学国際日本学部山脇啓造教授は、多文化共生研究の第一人者である一方、2018年からゼミ活動のテーマの一つとしてやさしい日本語を導入しており、学生による様々な取り組みが実践されている。

<https://yamawaki-seminar.o0o0.jp/>

また2022年に順天堂大学保健看護学部の1年生2名が、やさしい日本語について学ぶことでより良い医療やケアにつながるのではないかという思いから「やさしい日本語同好会」を発足させ、翌年には大学公認の「やさしい日本語部」に昇格、学内活動に加え、地元静岡県三島市の国際交流協会などとも連携してやさしい日本語の普及に取り組んでいる。

<https://www.juntendo.ac.jp/academics/faculty/hsn/life/club/00609.html>

2024年には静岡県が上記山脇ゼミとやさしい日本語部のメンバーを発表者とする「多文化共生わかものフォーラム in しずおか ～「やさしい日本語」ができること～」を開催、県内大学生・高校生を中心とした若者が多数参加した。

[https://fmc.pref.shizuoka.jp/article\\_post/6956/#b1](https://fmc.pref.shizuoka.jp/article_post/6956/#b1)

この他、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（KEIO SFC）では、総合政策学部平高史也教授の指導のもと、中牧莉香らによる東京都福生市における「やさしい日本語」による情報発信を軸とした政策提言が2008年度 SFC STUDENT AWARD に表彰された。同じく平高研究会では額田文美の卒業プロジェクト「お客様は外国人－日本語の接客接触場面における意識研究－」が2017年度の研究会優秀論文に選ばれている。平高教授と同じく日本語教育が専門の総合政策学部杉原由美研究室ではやさしい日本語をゼミ活動のプロジェクトの一つとしている。

<https://sugihara.sfc.keio.ac.jp/projects/yasashiinihongo>

専門学校の例として、北九州市立大学のクレシーニ・アン准教授が福岡県の宗像看護専門学校で教える「多言語コミュニケーション」の科目では、やさしい日本語のスキルが医療関係者の基礎コミュニケーションの基本として位置付けられており、吉開（2023）が教科書として使用されている。

### 2.2.2 高校等での取り組み事例

高校生の取り組みとしては、日本新聞協会が推進するNIE（Newspaper in Education、「教育に新聞を」）に取り組む兵庫県立伊川谷高等学校が、2023年に新聞記事のやさしい日本語書き換える授業を公開している。

[https://nie.jp/teacher/advisor/report/2023/10/18\\_015180.html](https://nie.jp/teacher/advisor/report/2023/10/18_015180.html)

スーパーグローバルスクールに指定されている東京都北区の順天高等学校では2019年からや

やさしい日本語を授業や同校行事に取り入れている。

<https://www.juntten.ed.jp/contents/contentslist/event/37500/>

またスーパーサイエンススクールに指定されている鳥取県の青翔開智高等学校では2024年、学校設定科目である「言葉と表現」という授業の中でやさしい日本語を取り上げ、グループごとにロールプレイをビデオ発表するなど取り組んだ。

<https://seishokaichi.jp/news/post-18765/>

中学校・小学校でもやさしい日本語を学ぶ動きが出ている。前述の明治大学山脇ゼミは小学校でのやさしい日本語出張ワークショップを実施している。またやさしい日本語でAI翻訳アプリを使うと変換精度が向上することから、外国語教育との関連でやさしい日本語が注目されている。2021年千葉県八千代市立睦中学校全生徒に対して、やさしい日本語と翻訳アプリ活用の授業が行われた。

<https://yasashii-nihongo-tourism.jp/2217.html>

神奈川県の小学校教員で外国語教育を専門とする成田潤也教諭は、著書（成田2024）において吉開（2023）を引用し「AI翻訳の使い手は、潜在的に『やさしい日本語』の使い手でもある」「日本語を調整する感覚は、英作文や英会話をする時にも非常に役に立つ」と述べて、小学校でもやさしい日本語に注目することを提言している。

<https://gendai.media/articles/-/133315?page=5>

<https://www.gakugeimirai.jp/archives/55216>

このような若い世代でのやさしい日本語を学ぶ機運拡大を背景に、筆者吉開が代表理事を務める一般社団法人やさしい日本語普及連絡会は、やさしい日本語に対する若い世代の関心を喚起するために、「やさしい日本語」ユース作文コンテストを2024年に開始した。

<https://www.yasanichi.com/contest2024>

### 2.3 大学教員としての課題意識

本短期大学部日本語コミュニケーション学科は日本文学・日本文化に関する知識と理解を深めつつ、美しい日本語の運用能力とビジネスの現場で役立つ実践的なコミュニケーションスキルを習得することを教育目的としている。本学のディプロマポリシーの一つ「国際的視野」については、授業の一部でそれを広げる機会はあるものの、国際関係や多文化共生を直接扱う学科専門科目は設置していない<sup>ii</sup>。

大塚は、外国人在住者が増加する現状から大学生たちが卒業後社会や地域で日本語に十分には習熟していない日本語非母語話者と接する機会が多いはずであり、その際必要となるであろう知識を習得させたいと考えた。そのためには、在学中に意識を持たせるとともに、やさしい日本語についても理解と関心を深めさせる必要があると認識した。そして、まずは自らの担当科目において、以下を目的とした試みを行うこととした。

- ①日ごろ用いている日本語を、やさしい日本語の観点から改めて考察させる。
- ②多文化共生に対する意識を向上させる。

日本語コミュニケーション学科の学生には①から導入することが容易だと判断し、やさしい日本語に着目した。そして、2022年に、吉開が主催する『入門・やさしい日本語』認定講師養成講座<sup>iii</sup>を受講した。

## 2.4 これまでの吉開の活動

### 2.4.1 活動開始初期

2016年やさしい日本語ツーリズム研究会設立後、吉開のやさしい日本語講演活動は2024年現在で400回を超えている。当初から口頭のコミュニケーションに重点をおいた内容となっており、やさしい日本語の基本的な心得として「はっきり言う・最後まで言う・短く言う」の頭文字をとった「ハサミの法則」というキーワードを、現在に至るまで提唱している。

2017年、生まれつき耳の聞こえない「ろう者」には日本語と全く違う「日本手話」を母語とし、日本語は第二言語として学んでいる人がいることを知って衝撃を受け、ろう者も外国人と同じ言語的少数派として日本語を苦手とする人が少なくないことを講演に盛り込んでいる。

2018年ごろからは、関西学院大学オストハイダ・テーヤが2006年に提唱した、日本人が外国人や障害のある人と直接話さず、同行している日本人・健常者に返事をする「第三者返答」という現象に注目し、どのような人に対しても迂回せず直接コミュニケーションをする態度が重要であることも講演で紹介している。

### 2.4.2 新型コロナ流行期

2020年の新型コロナ流行で講演活動が困難になったことをきっかけに、講演内容をすべて書籍化することを決心し、同年アスク出版から『入門・やさしい日本語』を出版した。この書籍ではハサミの法則を中心とした言語面でのやさしさ（易しさ）に加え、第三者返答などを例に挙げながら非言語面でのやさしさ（優しさ）も盛り込み、さらには外国人に限らずろう者や知的障害者・高齢者などへの配慮としてもやさしい日本語は重要であることをまとめている。

2021年、『入門・やさしい日本語』に盛り込んだ内容をラップの歌詞にした、やさしい日本語ラップ「やさしい せかい」という音楽動画を、明治大学国際日本学部山脇ゼミと連携して制作した。1番の歌詞では、言葉で解決できることをやさしい日本語の「ハサミの法則」で解決しよう、2番の歌詞では、言葉では解決できないことを「違いを認めあうまっすぐなハート」で解決しようというメッセージを込めている。この動画は公開直後1週間で1万回以上再生されるなど反響が大きく、一般に向けたやさしい日本語普及コンテンツとして現在に至るまで関係者に高く評価されている。吉開の現在の講演は「やさしい せかい」の歌詞に沿った解説という形で進められている。

同じく2021年、ろう者と手話の歴史や問題点を中立的に整理し、日本語教育とやさしい日本語の視点から解決を提言した『ろうと手話 やさしい日本語がひらく未来』を筑摩選書から出版した。2022年には同じく明治大学との連携により、第三者返答をテーマとした同名のショートムービーを公開した。



## 2.4.3 現在の活動

2023年3月吉開は電通を退社して独立、同年4月一般社団法人やさしい日本語普及連絡会を設立して代表理事に就任している。同年『入門・やさしい日本語』を増補版として改訂、「やさしい せかい」および「第三者返答」について詳しく収録した。

2023年の独立直前から、やさしい日本語の理念を中心とした講演活動以外に、具体的にやさしい日本語が身につくようなワークショップの開発も必要だと考えるようになった。そして誰でもかんたんにやさしい日本語のトレーニングができる「やさ日3文クッキング」というクイズコンテンツを開発、継続的にYouTubeやインスタグラムで公開している。このクイズはあるキーワードを3つの短い説明文から当てるというものであるが、これを逆から見れば「～は何ですか？」という質問に対する、端的でわかりやすい説明になっている。

少し太いペンです／字の上にぬります／大切な言葉がわかります→答え：「マーカー」

マーカーは何ですか→説明：少し太いペンです／字の上にぬります／大切な言葉がわかります

増補版『入門・やさしい日本語』では、やさしい日本語は「言い換えの技術」から「説明の技術」にシフトしていくべきだと提言しており、3文クッキングについても収録している。また現在の講演の最後15分ぐらいで、やさ日3文クッキングによる即席ワークショップを実施している。やさ日3文クッキングは静岡県がYouTube上のeラーニング動画として採用し、公開している。

## 2.5 吉開の大学向け講演内容

### 2.5.1 講演数

活動開始後からの吉開の講演回数は400回を超える。対象としてもっとも多いのは大学生向けであり、コロナ禍中にハイフレックス型授業が普及し出してから全国の大学でのオンライン講演が増加した。

表1 吉開講演回数

| lecture_category    | 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020 | 2021 | 2022 | 2023 | 2024 | 総計  |         |
|---------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|---------|
| ■ 大学・学校など           | 1    | 7    | 3    | 4    |      | 7    | 15   | 27   | 36   | 100 | 実地講演    |
| 大学・学校などの合計          |      |      |      |      | 2    | 15   | 21   | 6    | 6    | 50  | オンライン講演 |
| ✦ 自治体・職員向けなどの合計     | 1    | 7    | 3    | 4    | 2    | 22   | 36   | 33   | 42   | 150 | 合計      |
| ✦ NPO・国際交流団体の合計     |      |      | 3    | 3    | 4    | 2    | 6    | 7    | 12   | 13  |         |
| ✦ 自治体・観光関係向けなどの合計   | 2    |      | 7    | 15   | 2    | 2    | 3    | 2    | 3    | 36  |         |
| ✦ 企業・商工団体などの合計      |      |      | 1    | 6    | 8    | 2    | 3    | 3    | 4    | 31  |         |
| ✦ 自治体・一般向けなどの合計     |      |      | 1    | 5    | 3    | 5    | 5    | 3    | 1    | 29  |         |
| ✦ ろう・手話関連などの合計      |      |      |      |      |      | 8    | 9    | 5    | 2    | 24  |         |
| ✦ 公的施設などの合計         |      |      | 2    | 3    | 7    |      |      |      | 3    | 15  |         |
| ✦ 日本語学校などの合計        |      |      | 4    | 3    | 2    |      | 1    | 2    | 2    | 14  |         |
| ✦ 教職員・PTAなどの合計      |      |      |      | 1    | 3    |      | 3    | 1    | 3    | 13  |         |
| ✦ フォーラム・学会などの合計     | 1    | 1    | 3    | 1    | 1    | 1    | 1    |      | 2    | 11  |         |
| ✦ パネリスト・シンポジストなどの合計 | 1    | 1    | 1    | 3    |      | 1    |      | 1    | 2    | 10  |         |
| 総計                  | 5    | 18   | 46   | 62   | 29   | 59   | 70   | 69   | 85   | 443 |         |

(2024年10月25日現在、年末までの予定分含む)

大学生向けのゲスト講義が多い主な理由として以下のようなことが挙げられる。

- ・大学生向けは原則無償で実施している
- ・吉開は日本語教育能力検定試験合格者であり、大学の日本語教育・多文化共生関係者とのネットワークが広がった
- ・民間での実践者として、ゲスト講演招聘がしやすい
- ・毎年新しい学生が受講するため、同じ内容で毎年継続的に希望する教員が多い

## 2.5.2 講演の構成

大学での講演はリアクションペーパーという形で学生の感想がフィードバックされることが多いこともあり、少しずつ改善しながらも、毎年どの大学でも基本的に同じ内容で話をしている。以下はその主な構成である。

### ①導入（25分）

（第二言語としての日本語体験）

- ・韓国人が発音する英語由来の韓国語（例「ヘンボゴ」、ハンバーガーのこと）を聞かせ、わからないことを体験。同じことは日本のカタカナ英語を聞く外国人にも当てはまることを気づかせる。
- ・ローマ字で書いた日本語の文や単語をブラジル人やタイ人が発音した音声を聞かせ、わからないことを体験。ローマ字は世界共通の発音記号ではなく、ローマ字で書いた日本語は必ずしも日本語と同じように発音されないことを理解させる。

（日本語に関する外国人の実態や気持ち）

- ・入管庁の調査から、どんな国出身の外国人でも「日常会話に困らない程度に日本語が話せる」割合は80%程度あり、「日常会話に困らない程度に英語が話せる日本人」の割合よりはるかに多いことに気づかせる。また難しい災害情報をやさしい日本語に書き換えることは、命を救うことに直結することを示す。
- ・オリジナルメッセージビデオを使い、日本に来ている留学生は英語ではなくやさしい日本語で話しかけてくれることを望んでいるという事例を紹介する。

### ②やさしい日本語「ハサミの法則」（5分）

（ハサミの法則の解説と例示）

- ・やさしい日本語の定義に加え、はっきり・さいごまで・みじかく言う「ハサミの法則」を提示、復唱させる。
- ・ドラドラした長文の例を、動詞・述語のある箇所付近で切る練習。同時に短い一文に切れば英語など外国語に翻訳するのも簡単であり、やさしい日本語のスキルは語学学習にも役に立つことを提示する。



- ・やさしい日本語ラップ「やさしい せかい」の歌詞に沿った解説（30分）

やさしい日本語ラップ「やさしい せかい」のビデオを流す。約3分間。

（歌詞1番：日本語の言語面での難しさ）

- ・オノマトペは意外にむずかしく、避けたほうがいい
- ・漢字の動詞は和語に言い換える
- ・尊敬語・謙譲語は避け、「です・ます」など丁寧語の範囲にする
- ・和語でも複合動詞などは難しく、豊かな表現も時に諦める必要がある
- ・言葉で解決できることははっきり・さいごまで・みじかく言う「ハサミの法則」で解決
- ・「やさしい言葉があふれている世界を作ろう」

（歌詞2番：言葉で解決できないことはどうしたらいいか）

- ・第三者返答を紹介し、どんな相手とも直接話することが重要であることを示す
- ・命・権利・健康・財産については、相手の母語を保障する「電話通訳」が重要
- ・外国人だけでなく、生まれつき耳の聞こえないろう者も日本語の困り事がある
- ・知的障害や高齢者などにもやさしい日本語の考え方は重要
- ・言葉で解決できないことは、違いを認め合う「まっすぐなハート」で解決
- ・「やさしい気持ちがあふれている世界を作ろう」

- ・最後に「コミュニケーションの問題は、やさしい言葉とやさしい気持ちで解決しよう」と締める。

③「やさ日3文クッキング」を使ったミニワークショップ（15分）

- ・前後3～4人でグループを作り、以下のスライドを使って手順を説明。

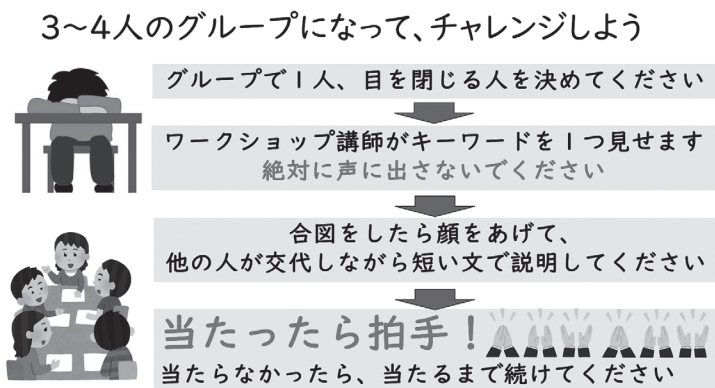


図1 「やさ日3文クッキング」スライド

- ・「オープンキャンパス」やお笑いの言葉など馴染みのあるキーワードを提示。
- ・当たったグループには大きな拍手をするよう促す。
- ・いくつかのグループにマイクを渡し、どのようなやさしい日本語でのヒントを出したか発表。

## 2.6 本学短期大学部での大塚と吉開との連携

大塚は『入門・やさしい日本語』認定講師養成講座の受講過程で吉開が大学でのレクチャーを実施していることを知り、翌年度の授業への導入を計画した。導入先授業は、2023年度、2024年度ともに、大塚が担当する学科専門科目「ことばと生活—社会言語学入門」である。当該授業は「多文化共生社会のためのやさしい日本語」として、シラバスにおける項目「ことばと多文化共生」（「ことばとジェンダー」、「包括的言語」を含む3週分）に位置づけた。また、2024年度は、当該授業に続く時限に開講する「卒業研究a」（ゼミ）にも吉開を招き、ディスカッションを実施した（3.2.2参照）。

その他、吉開の助言を受けて、大塚がやさしい日本語に関する様々な試みを行った。例えば、「MORE JAPAN やさしい日本語」のゼミ活動への導入、それを発展させた活動の学園祭での発表（3.2.3参照）、さらに養成講座修了生主催のワークショップに参加する機会を得て、それを参照して実施した第三者返答のワークショップ（3.2.4）などである。

## 3. 短期大学部日本語コミュニケーション学科での教育実践報告

### 3.1 実践概要

本章では、2年間の教育実践のうち、特に2024年度に重点を置いて報告する。以下の（1）～（2）はやさしい日本語、（3）は第三者返答に関する取り組みである。

- （1）講義科目でのレクチャー（「やさしい日本語で、やさしい世界を。」）の実施（吉開、3.2.1）
- （2）ゼミ活動における取り組み
  - （2-1）公用語に関するディスカッションの実施（吉開、3.2.2）
  - （2-2）MORE JAPAN やさしい日本語プロジェクトへの参加（大塚、3.2.3.1）
  - （2-2）学園祭での活動報告とブース参加（大塚、3.2.3.2）
- （3）講義科目での第三者返答に関するワークショップの実施（大塚、3.2.4）

### 3.2 実践詳細

#### 3.2.1 ゲスト講義リアクションペーパーとフォローアップにみる反応

吉開による最初のゲスト講義は2023年6月27日と翌2024年6月7日に実施した。ここでは2024年度の講義について報告する

ゲスト講義の前週に、28名の受講生に対して「やさしい日本語とはどういうものか、20～30文字で答えてみてください」という課題を出したところ、ほぼすべての学生が正しい理解をしていた。1名「子どもが使うような舌足らず」な日本語と回答があったが、このような捉え方は社会一般にもよくみられる。

表2は、実際に講義に出席した学生29名が回答した感想から、講義の流れに沿ってどのセッションが印象に残ったかを吉開がまとめた結果である。

表2 印象に残ったセッション（複数回答）

| 内容                        | 学生数 |
|---------------------------|-----|
| 第二言語としての日本語体験             | 4   |
| 日本語に関する外国人の実態や気持ち         | 9   |
| ハサミの法則の解説と例示              | 14  |
| 「やさしい せかい」鑑賞              | 3   |
| 歌詞1番：日本語の言語面での難しさ         | 10  |
| 歌詞2番：言葉で解決できないことはどうしたらいいか | 10  |
| やさ日3文クッキング                | 16  |

最後に行ったワークショップがもっとも評価が高く、次いでやさしい日本語の基礎である「ハサミの法則」であった。これは講演者としての意図通りであった。また歌詞の1番と2番を挙げたのが同数であったのも、講師としては「やさしい日本語は外国人の問題だけでなく、言葉の問題だけでもない」という趣旨がバランスよく伝わったものと理解している。

学生の感想を総合すると、「やさしい日本語」の重要性を深く理解し、より良いコミュニケーションを目指して、積極的に行動しようとする姿勢が認められた。以下は学生の感想をまとめたものである。

#### ●日本語に対する新たな視点

- ・日本語の奥深さへの気づき：オノマトペや敬語など、日本人にとって当たり前の言葉が、外国人にとっては非常に難しいものであることを理解し、日本語の奥深さ、複雑さに改めて気づいた。
- ・日本語の多様性への理解：地域による言葉の違いや、日本語学習者の母語による日本語の癖など、日本語の多様性について理解が深まった。
- ・やさしい日本語の重要性：「やさしい日本語」の重要性と必要性を強く感じた。

#### ●コミュニケーションへの意識の変化

- ・相手への配慮：外国人に対して、単に日本語を話すだけでなく、相手のことを考え、わかりやすい言葉で丁寧に話すことの大切さを学んだ。
- ・効果的なコミュニケーション：「ハサミの法則」を用いて、より効果的に相手に伝えることができることを学んだ。

#### ●社会への貢献意識

- ・多文化共生：日本社会における多文化共生について関心を持ち、自分にもできることを考え

たい。

・社会貢献：「やさしい日本語」を社会に広めることで、より良い社会の実現に貢献したい。

●自己成長への意欲

・学習意欲：日本語学習者に対する理解を深め、より良いコミュニケーションを目指して、自ら学習したい。

・表現力向上：「やさしい日本語」を習得することで、自分の表現力を向上させたい。

・多角的な視点：様々な視点から物事を考え、自分の考えを言葉で表現する力を身につけたい。

●その他

・ワークショップへの満足度：ワークショップを通じて、楽しみながら「やさしい日本語」について学ぶことができ、有意義な時間だったと感じたことが認められた。

・実践への意欲：授業で学んだことを、日常生活やアルバイトなどで実践したいという意欲が強く認められた。

また講義後の感想提出と同時に、吉開がほぼ同様の内容で講義した法政大学キャリアデザイン学部「多文化教育」（村田晶子教授）の学生からの代表的な疑問・質問に対して、今回のレクチャーを受講した学生たちがどの程度共感しているか調査した。結果は以下の表の通りである。

表3 「学生からの代表的な疑問・質問」に対する本学生の共感度

|                                                                                                                      | 100%～75%程度共感し、同様の疑問を抱くこともある | 50%程度共感し、同様の疑問を抱くこともある | 25%～0%程度の共感。同様の疑問を抱くことはほとんどない |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------|------------------------|-------------------------------|
| 「①英語圏からの留学生などと交流する時に、やさしい日本語よりも英語で話す方が心を開いてくれたように感じました。やさしい日本語はどの国の日本語学習者にも使うべきですか。」について最も近いものを選んでください。              | 6                           | 13                     | 5                             |
| 「②日本人同士のローカルなコミュニティでは通常の日本語が用いられると思いますが、外国人の方に対して過剰にやさしい日本語を使うと日本人との間に心理的な見えない壁が生まれる可能性はないのでしょうか」について最も近いものを選んでください。 | 8                           | 8                      | 8                             |
| 「③やさしい日本語が公共機関等でも使われることで、日本の児童等が間違った日本語を習得していくというリスクはあると思いますか。」について最も近いものを選んでください。                                   | 7                           | 5                      | 12                            |

|                                                                                                                  |   |   |   |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|---|---|
| 「④（敬語は日本語学習者には難しいという話に対して）敬語や丁寧語を使って話してはいけませんか。タメ語を使った方がいいのですか？また外国の方は、どちらで話された方がうれしいのでしょうか。」について最も近いものを選んでください。 | 8 | 7 | 9 |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|---|---|

(各項目の疑問・質問の出典：吉開 2024：189)

特に大きな傾向は見られず、学生の考え方は様々であった。③については「やさしい日本語は間違った日本語ではない」と明記した学生が24名中13名おり、ありがちな誤解に対して講義を通じてきちんと理解していることが伺える。

### 3.2.2 「公用語」に関するディスカッション

2024年にはレクチャーの次の時限のゼミ授業において、「日本でも英語を公用語にしよう、という意見に対して、あなたはどう思いますか」という質問に回答させた。

事前回答したゼミ生21人中、公用語化に賛成は5名、反対は16名という結果となった。

賛成という学生の主な事前意見は以下のようなものだった

- ・現在の日本は、海外の人も多く在住していて働いている人も多いため、必要な言語なのではないかと感じる場面が多々あるから。
- ・英語を公用語にすることで、国際化の促進を図ることが出来ると思う。また、日本に海外の方が今後さらに増えていくので、より良いグローバル社会にも繋がるのではないかなと思う。

一方、反対という学生の主な事前意見の代表的なものは以下の通りである

- ・日本語は日本にしかないため、文化として守るべき。
- ・英語は必要な時に話せばいいと思うので、正式に決めなくてもいいと思うため。学ぶ義務が増えてしまう。
- ・日本語をなくすのは悲しいから
- ・英語も公用語になってしまうと外国人に対して英語ばかり利用されてしまい、日本語が忘れ去られてしまいそうだから。
- ・英語が日常に変わることによって順応できないなどの理由で、他の年代とのコミュニケーションに溝が深まってしまうかもしれない。
- ・現状、日本で英語を公用語にできるレベルの教育が出来ていないと思うので、するのならまずそこから変えるべきだと思ったから。
- ・日本語ならではのコミュニケーションのとり方があるから。
- ・日本語には英語には無い表現も多くあるし、日本語と英語では離れすぎているから現実的では無いと思う。

総合すると、

- ・賛成者：国内の国際化にも英語が有効という考え

- 反対者：日本語の地位が下がり、日本人も英語を使うようになることへの抵抗という傾向が見えた。

これに対して吉開からは以下のような流れで「公用語」の正確な理解をうながし、他国の事情と、日本における手話の公用語化の動きについて紹介した上で、「やさしい日本語」の役割について見解を述べた。

- 公用語とは、国民がその言葉だけですべての行政手続きやサービスを享受できるよう、国側の義務として定められたものであり、国民側に他の公用語の習得を義務付けるものではない。
- スイスの公用語はドイツ語・フランス語・イタリア語・ロマンシュ語の4つであるが、仮に国民が一定の英語を使えるとしても、それを公用語にはしていない。便利だからという理由で英語を入れるという考えはない。
- インドではヒンディー語が連邦政府全体の公用語、英語が準公用語とされ、それ以外に州の公用語として22の言語が指定されている。イギリスからの独立を機に、公用語をヒンディー語だけにしようとしたこともあったが、他の言語話者の反対を受けて英語が公用語として残っている。
- インドネシアの独立運動の歴史の中で、「一つの祖国、一つの民族、一つの言語」という「青年の誓い」というスローガンが生まれた。実際はインドネシアは多様な言語を話す多民族で構成されているが、オランダからの独立を目指す上で全員が「インドネシア民族」であり、全員が「インドネシア語」を使うことを誓うというものである。インドネシア語はマレー語と似た、比較的かんたんに習得できる言語であり、ジャワ語やスンダ語など民族固有の言語以外に、統一・独立の象徴として国家語になった。
- 生まれつき耳の聞こえない「ろう者」には、手話を母語とする人がいる。ろう者の言語である手話は、障害児教育が始まった19世紀ぐらいから、ろう学校に集まったろうの子どもたちが、お互い仲良くなりたいという動機から手指表現を中心としたコミュニケーションを作り出し、それが後輩に引き継がれていくなかで言語として確立していったものである。この意味で、手話というのはろう者の歴史とアイデンティティに深く関わっている。
- 手話を母語とするろう者は外国人と同様、日本語を苦手とする人が多い。また手話は「手真似・猿真似」と馬鹿にされ、ろう教育で長く禁止された歴史がある。このためろう者団体の運動は「手話の公用語化」が悲願であり、多くの自治体で「手話言語条例」が制定され、行政サービスなどに手話が保障されてきている。しかしそもそも日本の憲法・法律には公用語の規定がないため、法律レベルで手話を公用語にすることは極めて困難である。
- また地方自治法第10条に定められている通り、地方自治体の住民は日本国籍の有無に関わらず行政サービスを受ける権利と負担する義務がある。つまり、現在の法律体系的にも地方行政は多言語に対応する義務があると言える。手話言語条例により自治体単位



で手話に特別の地位を付与していることはその差別の歴史から当然のことと言えるが、今後外国人住民が増えていく中で中国・ベトナム・ブラジルなどの住民がそれぞれの運動体をつくって母語の保障を求めるようなことになれば、混乱や分断をもたらす恐れもある。

- ・「やさしい日本語」は、このような混乱・分断を未然に防ぐ、現実的で平和的な取り組みと言えるのではないだろうか。

この解説をした後に、改めてゼミ生からの感想をまとめた。主な意見は以下のようなものである。

- ・手話には独自の文法が存在していると知り驚いた。また手話の使用が禁止されていた時代があったことにも驚いた。言語についてまだまだ知らないことが多いと感じたので、これからもっと学んでいきたい。
- ・言語について自分が考えているよりもっと深く知ることができた。言語を制限して教育を進めたり、国を強くしたりということがあったが、言語の始まりはコミュニケーションをとりたいたいという純粋な気持ちなのだと学んだ。
- ・日本国内で公用語は制定されていないことに非常に驚いた。日本で英語を公用語にすべきかというのは初めとても軽い気持ちで答えていたが、それを認めれば全てが公用語になりかねず、キリのない話だと気づいた。
- ・やさしい日本語は外国人だけでなく、日本人にも用いることでハードルを下げ、やさしい世界になっていくと考えた。
- ・公用語について深く考えたことがなく、実は日本の公用語が日本語とは正式に定められていなかったり、公用語が1つではなく、いくつもある国が存在することなどを知って驚いた。
- ・公用語を決定する場面でもその国や地域の歴史、政治の特徴的なものがあらわれていて興味深かった。
- ・国際化が進む中で、英語を話せるようにならなければと義務的に思っていたが、誇りを持って日本語を磨いていこうと思った。

意見を見る限り、吉開の考えていることがよく伝わり、学生それぞれに考えさせる時間になっていたと思う。

### 3.2.3 ゼミ活動におけるやさしい日本語プロジェクト

#### 3.2.3.1 MORE JAPAN やさしい日本語

2023年度のゼミ活動にやさしい日本語を導入したきっかけは、MORE JAPAN やさしい日本語の企画への参加であった。集英社が刊行するファッション雑誌「MORE」編集部では、公式WEBマガジン「MORE WEB」<sup>iv</sup>を運営している。多数あるコンテンツのうちの「MORE

JAPAN」は、「日本全国のさまざまな地域を応援するために発足したプロジェクト」であり、主読者である20代女性のニーズに即した情報を発信する本誌・WEB連動型の企画である。その人気記事を日本に住む外国の人などにも伝わりやすいよう、やさしい日本語に書き換えて配信する企画が2023年6月に開始された。記事の書き換えには本学を含む国内の6大学<sup>v</sup>の学生たちが担当することとなった。

これに関する2023年度の活動については大塚（2024）で報告済みのため、本稿ではごく簡単なまとめにとどめておく。2023年度は大塚が担当するゼミの22名に韓国敬仁女子大学からの交換留学生2名を加えた24名で活動を行った。グループ単位で記事作成に取り組み、グループ間の相互点検を経て教員が監修した上で集英社の編集者に送るという手順で作業を進めた。10月以降は有志学生を中心に毎月1本の記事を書き換える活動を継続した。

また、8月公開記事からは、その後大学間での連携協定を結んだ神田外語大学の留学生のチェックを受ける過程を追加したほか、1月末には神田外語大学留学生とやさしい日本語で交流するイベントも実施した。

2023年度はゼミの案内段階では本企画が持ち上がっていなかったため、各学生のゼミ所属決定後に通知する形となった。これに対し、2024年度は事前にやさしい日本語プロジェクトへの取り組みに言及することができた。所属希望者の中には、2023年度の授業でやさしい日本語にふれた学生や、学園祭ブースを訪れた学生もおり、本活動への参加がゼミ所属希望の動機となっている学生もいた。そこで、3月中に有志を募り、4月公開記事の書き替えに取り組みさせた。初回ながら完成度が高く、学生たちの意識の高さが実感された。

前年度と同様の要領で5月公開記事に取り組んだ後、5月半ばに、集英社の編集担当者を招いてレクチャーとワークショップを実施した。主な内容は以下の3点である。

- ・MORE JAPAN やさしい日本語のコンセプト説明
- ・これまでの書き換え記事紹介
- ・グループ別単位での書き換えワークショップ

授業後、今回学んだことや書き換えワークの感想等を尋ねるアンケートを実施した。このうち「これまで抱いていたやさしい日本語への印象が変化したかどうか」という問いの回答を以下にまとめる。アンケート回答者15名中、13名（86.7%）が「変化した」と回答した。その理由は大きく以下の3種に分類できる。

1点目は「母語話者が思うよりも、もっとわかりやすく書き換える必要があることがわかった」という趣旨の回答である。これは、レクチャーで視聴した動画（講師と日本語非母語話者との会話場面）において、母語話者が通常使っていることばが非母語話者に伝わりにくかった点が印象に残ったものと思われる。

2点目は「単純にわかりやすく書き換えると考えていたが、若者ならではの表現方法や外国人が日本で使いやすい日本語はあえて変えない方がよいことを学んだ」という回答である。このよ

うに「実践に役立つ表現」というとらえ方のほか、「少し難しい表現でもあえて残すことで日本の文化に触れる機会を作れるため、表現の取捨選択が異文化交流のひとつにもなる」という意見も見られた。

3点目は「書き換え時は正確さを重視すべきだと思っていたが、その限りではない」といった意見であり、2点目と少々類似している。「災害など、生きるために必要だから使っているというイメージが強かったが、日本語学習者が生活を楽しむための+αのものにも使える、日本語母語話者のホスピタリティのようなのだとわかった」といった、減災のためのやさしい日本語と対比させて捉えた意見が見られた。また、「MORE JAPANの記事や伝えたいことは市役所の手続きなどではない」ことに注目し、そこに伴う「書き手や話し手の気持ち・感情」を添えることで、「やさしい日本語がより親切にかわいらしく」感じられたと言う意見も見られた。

「印象の変化はない」という意見も含め、三者三様の意見があることはもっともであるが、学生たちが2点目、3点目の視点を持てた点からレクチャーの効果を実感した。同時に今後このプロジェクトに関わる学生たちへの事前説明の重要性が示唆された。

### 3.2.3.2 学園祭での取り組み

2023年度、2024年度と連続して卒業研究ゼミで、「やさしい日本語プロジェクト」として学園祭でブースを設置する形での参加を行った。

前項で触れた MORE JAPAN やさしい日本語のプロジェクトへの参加を通して、学生たちはやさしい日本語への理解と関心を深めることができた。しかしながら、第三者による経験についての書き換え作業は、特に味覚や食感を中心とした記述が多いという記事の性格上、時に困難を極めた。これとは別に、学生たち自らの五感に基づく経験をやさしい日本語で表現する機会を設けることがさらなる学びにつながることを確信された。そこで両年度において本学の「ゼミナール等の活性化」予算に申請して採択され、活動成果を学園祭で発表させることができた。

両年度に共通する取り組みは以下の通りである。

まず、グループごとに大学周辺の「おすすめスポット」を選んで取材を行い、やさしい日本語で記事を作成する。活動の説明と各学生の感想も同様にまとめ、これらを学園祭ブースでの展示用パネルとするとともに同内容の電子ブックを作成してゼミのウェブサイト<sup>vi</sup>に掲載した。

2023年度は「おすすめスポット」を自由に選ばせたが、カフェ系統の店に集中したため2024年度は事前にゼミ内でテーマを決めて選択させた。4～6月の MORE JAPAN の書き換え経験をふまえ、当該年度の研究対象としてオノマトペや色彩表現、味覚・食感、嗅覚・感覚・感情等が上位に選ばれた。その上で、極力異なるタイプのスポットを紹介できるよう相談や調整を行い、原宿の食べ歩きやメイドカフェ、代々木公園などを含むバラエティ豊かなスポット紹介が実現した。

学園祭当日のブース内容にも変化を加えた。2023年度はパネル展示を中心として学生は来場者への説明を担当する形式に留まったが、2024年度はそれにワークショップの実施を追加した。学生たちの提案に基づき、以下の(1)～(4)を行った。(3)は吉開が開発した「やさ日3文クッキング」(2.4参照)に基づいているが、(4)は学生による新規の企画である。

- (1) やさしい日本語の説明…吉開（2024a）を参照して PowerPoint スライドを作成し、当日はスライドショーとして投影
- (2) やさしい日本語書き換え体験…文単位の書き換えと、MORE JAPAN の記事の書き換えの2種を用意
- (3) 3文クッキング…オノマトペ編と日常言語編とに分けて準備、前者はフリップも用意
- (4) やさしい日本語かるた…グルメをテーマに、やさしい日本語による読み札とイラストを描いた取り札を学生が作成

今回初めて取り組むワークショップを成功させるべく、入念な準備を行った。近隣のインターナショナルスクール（高等部）<sup>vii</sup>との定期交流授業の場を利用してリハーサルを2回実施し、1回目（7月）で得られた各学生の気づきを共有し、ブラッシュアップを図った上で、2回目（9月）に臨んだ。

本番では展示とスライドショーを見た後に各ワークを体験してもらうことを想定していたが、予想以上の来場者によりブースが混雑したため、1名の学生が複数の来場者対応ができる三文クッキングやかるとを中心に、いずれかのワークに参加してもらう形式に変更して対応した。

来場者には、前年度同様 Google forms によるアンケートへの回答を依頼した。今回は、学生の提案を元に質問項目を作成して、ワーク参加後に回答してもらった。初日の午前中は十分な案内に至らず正味1日半の実施となったが、計184名から回答を得ることができた。来場者には家族連れも多く、ブース来場者は少なくとも200名以上に上ったと見られる。

以下、来場者アンケート結果について報告する。質問項目は以下の通りである。

- Q1 来場者属性
- Q2 やさしい日本語を知っているかどうか
- Q3 （Q2で「はい」のみ）やさしい日本語を知った経緯
- Q4 どのコーナー（体験）が楽しかったか
- Q5 今後やさしい日本語を使ってみたいかどうか
- Q6 感想・気づいた点など

来場者属性の内訳は、多い順に社会人が88名（47.8%）、大学生等が80名（43.5%）、中学生以下9名（4.9%）、高校生7名（3.8%）であった。「大学生等」の詳細は本学大学生52名（28.3%）、他大学生27名（14.7%）、大学院生1名（0.5%）である。

Q2でやさしい日本語を「知っていた」と答えたのは50名（27.2%）、「知らなかった」が134名（72.8%）であった。この数値は前年度のアンケート結果（23.5%）と同程度である<sup>viii</sup>。このやさしい日本語の認知度を回答者属性別に見ると、社会人は27.3%、大学生以上は28.2%とほぼ同程度であった。ただし、本学学生については36.5%と他より高めであった。

Q3 のやさしい日本語を知った経緯について、回答者属性とのクロス集計結果をまとめた表を以下に示す。

表 4 やさしい日本語を知った経緯（回答者属性別、複数回答可）

|                            | 中学生<br>以下 | 高校生 | 社会人 | 他大生 | 本学生 | 計  |
|----------------------------|-----------|-----|-----|-----|-----|----|
| メディア（新聞・ニュース・<br>Web・SNS）で | 1         | 1   | 7   | 3   | 3   | 15 |
| 学校の授業等で                    |           | 1   | 10  |     | 16  | 27 |
| イベント等への参加を通して              |           |     | 4   |     | 2   | 6  |
| 知人から聞いて                    |           | 1   | 7   |     | 1   | 9  |
| 計                          | 1         | 3   | 28  | 3   | 22  | 57 |

「学校の授業等で」知ったという回答は本学大学生に目立つが、社会人においてもこの回答が最も多い。社会人の年齢層は幅が広く、この回答は比較的最近の卒業生によるものと推察される。

Q5 の「今後やさしい日本語を使ってみたいか」という問いに対しては、174 名（94.6%）が「はい」と回答した。ただし、「いいえ」と答えた半数が Q6 で肯定的な感想を寄せていた。単に「使う機会がない」と判断された可能性もあるが、「誰にでもすぐに使えるもの」という点を伝えきれなかったとも考えられるため、今後の課題としたい。

Q6 は「感想」「気づいた点」についての自由記述であり、概ね肯定的なコメントが寄せられた。これを「何について」「どのように」記述されているかという点で整理したものが表 5 である。全員回答必須としたため「特になし」という回答<sup>ix</sup>も一定数あった。

表 5 学園祭来場者の感想

|          | よい | 興味<br>関心 | 楽しい | 気づき<br>学び | 提案 | 他  | 特になし | 計   |
|----------|----|----------|-----|-----------|----|----|------|-----|
| 企画全般     | 11 | 4        | 44  | 4         | 2  | 2  |      | 67  |
| 展示       | 7  | 1        | 2   |           | 1  |    | 1    | 12  |
| 書き換え     |    |          |     | 6         |    | 2  |      | 8   |
| 3 文クッキング | 1  | 2        | 3   | 1         |    |    |      | 7   |
| カルタ      | 2  | 1        | 9   |           |    |    |      | 12  |
| その他      |    |          |     | 1         | 1  | 5  | 1    | 8   |
| やさしい日本語  | 2  |          | 3   | 46        | 1  | 1  |      | 53  |
| 学生の応対    | 4  |          | 1   |           |    | 2  |      | 7   |
| 特になし     |    |          |     |           |    |    | 10   | 10  |
| 計        | 27 | 7        | 62  | 59        | 5  | 12 | 12   | 184 |

表5から、感想における言及先が主に以下の2点に集中していることがわかる。

- ・今回の企画全般についての評価（特に「楽しかった」）
- ・やさしい日本語についての気づきや学び

つまり、多くの来場者が企画を楽しんだり、やさしい日本語について気づきを得たりできたということであり、本企画の目標が十分に達成できたと評価してよいであろう。

学生たち自身の気づきや感想の一部を以下に紹介する。

- ・予想を大幅に上回る来場者があり、ゼミ活動であるやさしい日本語を伝える価値があった。やさしい日本語について知ってもらえただけでも、やりがいがあった。
- ・来場者に笑顔で対応することを心がけ、リハーサルでの経験を生かしながら実践でき、自分たち自身も楽しく過ごせた。
- ・かるたが特に子どもや保護者の方から非常に好評だった。かるたを楽しみながらもやさしい日本語で表現することの目的に感心してくださり、達成感を感じた。
- ・想像以上の来場者に世代ごとに寄り添ってコミュニケーションを取りながら、ゼミの展示を紹介したりワークに参加してもらったりできた。
- ・協力し合い、スムーズに運営ができた。想像以上に人が来てくれて嬉しかったし、大きなやりがいを感じた。貴重な体験になったと思う。
- ・多くの方に来ていただいて感じたのは、まだやさしい日本語が浸透していないという点であった。自分自身もこの取り組みを行っていなければ分からなかったことなので、知ることができてよかった。

大半の学生が来場者の反応に対して肯定的な感情を抱き、「やりがい」や「達成感」を得ていた。自らの貢献、他のメンバーとの協働に加え、来場者への応対から得た成果への言及も目立ち、学びを社会に向けて発信する機会となったことが確認できる。ある学生は、来場者にやさしい日本語の意義と重要性を伝えるに当たり、自らもアルバイト先でやさしい日本語を活用していることに言及したところ、大いに共感を得られたと報告していた。このように、学生たちが日常生活において自らやさしい日本語を活用してその効果を実感することや、その経験をゼミの中で共有する機会を用意することが有効だと示唆された。

さらに幸いなことに、2023年度の学長賞（研究部門）に続き、同窓会から賞（研究部門）を受けることができた。短期大学部として参加する最後の学園祭を有終の美で飾れたことを大変喜ばしく感じている。

### 3.2.4 「第三者返答」ワークショップ

2章で触れた第三者返答については、吉開よりショートムービーを用いた授業展開案を提供さ



れるとともに、養成講座1期生が主催したワークショップ（2022年12月14日開催）に参加する機会を得た。ワークショップは5～6名のグループ形式で実施され、ムービー視聴後にロールプレイで理解を深めた。ロールプレイは以下の2つの場面が用意され、それぞれ3名の登場人物によるシナリオ形式<sup>x</sup>となっていた。

場面1：外国人が通りがかりの人に道を尋ねるが、その回答は同行者の友人（日本人）に対して行われる。

場面2：目の不自由な人が買い物に行くが、店員は同行の友人（健常者）にのみ話しかける。

第三者返答の授業への導入は、2023年度と2024年度に専門科目「コミュニケーションと心理」の終盤で「コミュニケーションの壁」という項目を立てて扱った。前項同様2023年度については大塚（2024）で報告済みであるため、以下に2024年度の実施報告を行う。

2024年度の当該科目の受講者数は50名（短期大学部2年生48名、渋谷四大学連携プログラムによる他大学受講生2名<sup>vi</sup>）である。授業はTBL（Team Based Learning）を導入し、全授業を固定チーム（グループ）単位で実施した。

当日は当事者の生の声を聞くためにゲストを招いた。ゲスト紹介後、以下の順に授業を進行した。下線部は2024年度に新規に加えた活動である。

- (1) ショートムービー A「カフェ接客シーン」（51 秒）を視聴
- (2) 各自が感じたことをチーム内で話し合い、リーダーがアンケートアプリで報告
- (3) ショートムービー B「アリスの授業シーン」（45 秒）を視聴
- (4) 各自が感じたことをチーム内で話し合い、リーダーがアンケートアプリで報告
- (5) (1) (3) を含むフルバージョン（7 分）を視聴
- (6) 各自が感じたことを（それぞれ）アンケートアプリで報告
- (7) 第三者返答についての簡単なレクチャー（オストハイダ 2009、吉開 2023）
- (8) ゲストによる経験談
- (9) ロールプレイ（前述の2種をアレンジしたもの）実施
- (10) チームでロールプレイのシナリオ作成
- (11) ロールプレイ披露
- (12) グランプリを決めるための投票
- (13) 事後学修課題（リアクションペーパー）

(1)「カフェ接客シーン」は、日本語を流暢に操るアリスからの質問に対して、店員がアリスではなく同行者の友人（日本人）に返答するという場面である。これについては、10グループ中8グループが状況を正しく理解していた。ただし、問題点の分析結果まで言及できていたのは2グループのみであった。

- ・日本人ではないというだけで言葉が通じないと勝手に思い込んで日本人の方を見て接客をしていたので、海外の人は不快な表情をしていたのだと思った。
- ・外国人も日本語を喋っていたのに店員はずっと日本人を見て接客していて、知らない間に壁を作っている、差別している、といった印象があった。

(3)「アリスの授業シーン」は、目の不自由な教員による授業受講中に、日本人学生（アリスの友人）とアリスとがそれぞれ授業補助者に質問したことを教員が正す場面が盛り込まれている。この点については、(1)に比してかなり理解度が低かった。状況と問題点の双方を正しく理解できているグループは皆無であり、「外国人への配慮が足りなかった」「質問は先生にするのが普通という暗黙のルールを外国人の人に押し付けてしまった」といった回答がみられた。(1)のカフェシーンを視聴して「外国人への配慮」や、アリスが「嫌な思いをした経験」をテーマと捉えて(3)を視聴した可能性もあると考えられる。ただし、(5)でフルバージョンを視聴した後の各学生の感想からは、ほぼ全員が状況を正しく理解し、問題点も把握できていた。

(8)でゲストスピーカーは、夫婦でイタリアンレストランを訪れた折に、自分の質問に対して店員が日本人の夫に返答したことにより、「料理が全く美味しく感じられなかった」「日本語ができないから馬鹿にされているように感じた」「楽しみにしていたのに残念だった」と自身の経験を語り、履修生は熱心に聞き入っていた。

(9)にも十分な時間を取った上で、(10)を行った。まず各チームにストーリーと登場人物のうちの当事者の属性（外国人、車椅子に乗った人等）を考えさせた。予め当事者（緑）、同行者（青）、店員等（黄）それぞれを色分けした「吹き出し」用紙を用意して、話し合いを元に作業を分担できるようにした。また、ロールプレイの実施に当たっては立ち上がりて動きも入れて演技することを指示したところ、(11)においては視線や表情を含めた熱演ぶりが観察された。設定された場面はコンビニ等店舗での接客場面が大半だったが、中には小児科医と患者の子ども、母親という組み合わせも見られた。

最後に、(13)で提出されたロールプレイの感想の一部を抜粋して以下に示す（傍線は大塚による）。

- ・シナリオがすらすらと思い浮かんだので第三者返答は身近にあるものだと気づいた。
- ・シナリオのセリフを紙に書き出したり、他チームのセリフを聞いたりする中で、当事者役の質問を店員役がわざわざ同行者へ返答することはとても不自然なコミュニケーションのとり方だと感じた。
- ・自分が店員に話しかけているのに同行者に目線を向けて答えられてしまうと、話しかけた本人だけではなく、同行者も嫌な気持ちになることがわかった。
- ・当事者役をした際には「なぜ私が質問したのに、私の目を見て答えてくれないのだろう」と悲しくなり、同行者役では「私は質問してないから、私に答えられても困るなあ」と感じたことから、第三者返答は気分が良くないものだと実感した。

- ・他のグループのものをみて、言語表現以外にも、目線や指差し、誰に受け取ってもらうかなどの非言語的な表現でも第三者返答が成り立つということが分かった。
- ・第三者返答をしてしまうのかと考えたときに「もし伝わらなかったらどうしよう」と不安と少しの恐怖心があるからではないかと思った。私の場合は伝わらなかった時の不安が怖くて第三者返答をしてしまうと思う。しかし、質問した側からしたらモヤっと少し嫌な気持ちになるのだとわかったので、今後このような場面があるときには意識したい。

今回の取り組みのうち、特にゲストによる生の声を聞く機会を設けた点と、ロールプレイのシナリオ作成の実施が有効であったと考えられる。いずれも本年度新たに追加した部分であり、前年度の教育実践を踏まえた改善が図れたと言えるだろう。

#### 4. 考察

ここで、冒頭で提示した問いを検証したい。

- (1) 国際的な学びを専門としていない2年課程の短期大学部の学生が、やさしい日本語を通して多文化共生への理解を深めることはどの程度可能か。
- (2) (1)に加えて、さらに学生自身がインフルエンサーとして情報発信できる姿勢を培うためには、そのようなアプローチが有効であるか。

(1) は、吉開によるレクチャーおよびその前後の学修課題やフォローアップを通して概ね達成できた。さらに、MORE JAPAN ややさしい日本語記事の書き換えプロジェクトのような定期的な活動への参加によって学びの定着と持続性を図れることや、第三者返答ワークショップを通して、非言語面でも多文化共生についての学びを深められることが確認できた。

(2) については、学生自身がやさしい日本語の意義を直接伝えたり、ワークショップ形式の活動等を企画・運営したりすることが一定の成果につながることを確認した。ただし、日常生活で学生たち自らがやさしい日本語を活用してその効果を実感し、それをゼミの中で共有する機会を用意するなど、さらなるアプローチを加える必要性が示唆された。

#### 5. おわりに

本稿では、はじめに大学教育におけるやさしい日本語の導入の意義を確認し、本学外での取り組み事例や吉開の活動を報告した。そして、2023～2024年度の本学での教育実践例報告とその効果検証を行い、国際的な学びを専門としていない2年課程の学生たちがやさしい日本語を通して多文化共生への理解と関心を深められたこと、さらにはゼミでの活動を通して自らがやさしい日本語の重要性を発信できる可能性が高まることを確認した。2年間の取り組みを通して、本学短期大学部最後の在学学生に有意義な学びの機会を提供することができたと評価できよう。

一方、ゼミでの授業におけるさらなるアプローチの追加が課題として残った。また、今回は2

年課程の短期大学部を例としたが、4年課程で実現可能な教育実践や教育プログラム構築についても今後の課題として検討していきたい。

## 〔注〕

- i web情報の最終閲覧日はいずれも2024年11月1日
- ii これらを間接的に扱う科目として日本語教育の概論があるが、日本語教員養成課程を設置していないため、関心を持つ学生は四年制大学に編入学して学びを深めるケースが多い。
- iii 「認定講師養成講座」は、終了後各自の専門性や志向性を活かした活動を円滑に行えるよう第8期（2024年）より「認定者養成講座」と改名されている。
- iv <https://more.hpplus.jp/>
- v 甲南女子大学、白百合女子大学、聖心女子大学、明治大学、麗澤大学（2023年6月時点）
- vi 短期大学部閉鎖後は電子ブックを掲載したゼミページへのアクセスができなくなるため、本稿にはリンクを掲載していない。
- vii 東京インターハイスクール（<https://www.inter-highschool.ne.jp>）とは2017年度から定期的に交流授業を実施している。この学校のアメリカ本校が所在するワシントン州では、英語を母語としないネイティブアメリカンの人々が多数居住する歴史的背景をもとに、子どもたちは一番理解の深い言語で学ぶ権利が保障されており、英語はもちろん、日本語でも学習・単位取得が可能である。
- viii 2023年度の質問は2択ではなく「知っていた」「聞いたことがあった（がよく知らなかった）」「初めて聞いた」の3択とし、「知らなかった」は52.9%であった。
- ix 学園祭で実施されていたスタンプラリーだけを目的に本ブースに立ち寄った来場者もいた。
- x ワークショップ主催者の厚意により、シナリオを持ち帰り、参考にするものの許可を得た。
- xi 短期大学部は2023年度末に募集停止しており、2024年度の在籍生は2年生のみである。ちなみに他大学の2名は男子大学生であった。

## 〔参考文献〕

- 阿部治子他編著（2023）『図書館員のための「やさしい日本語」』日本図書館協会
- 庵功雄（2016）『やさしい日本語—多文化共生社会へ』岩波書店（岩波新書）
- 岩田一成・柳田直美（2020）『やさしい日本語で伝わる！公務員のための外国人対応』学陽書房
- 大塚みさ（2024）「大学教育における多文化共生マインド醸成の可能性を探って—「やさしい日本語」の導入による一試み—」『歌子』32, 15-24.
- オストハイダ, テーヤ. (2005) 「聞いたのはこちらなのに…：外国人と身体障害者に対する『第三者返答』をめぐって」『社会言語科学』, 7 (2), 39-49.
- 加藤好崇編著（2019）『「やさしい日本語」で観光客を迎えよう—インバウンドの新しい風』大修館書店
- 武田裕子他（2021）『医療現場の外国人対応 英語だけじゃない「やさしい日本語」』南山堂
- 成田潤也（2024）『マンガでサポート！他教科コラボのChaChat 英語：英語が苦手!?な担任でも創れる小学校外国語活動』学芸みらい社
- 日本経済新聞（2024）3月19日付朝刊「見えてきた外国人『1割』時代」
- 堀清和監修（2022）『SDGsの推進・合理的配慮提供のための「やさしい日本語」—教育・福祉・就労の場で活用できる実践的コミュニケーション』晃洋書房
- 吉開章（2021）『ろうと手話 やさしい日本語がひらく未来』筑摩書房（筑摩選書）
- 吉開章（2023）『増補版 入門・やさしい日本語 外国人と日本語で話そう』アスク出版
- 吉開章（2024a）『「やさしい日本語より英語でしょ？」——日本の大学生に『やさしい日本語』を通じて伝えたいこと』村田晶子・神吉宇一編著『日本語学習は本当に必要か——多様な現場の葛藤とことばの教育』189-197.
- 吉開章（2024b）『やさしい日本語3文トレーニング』駒草出版

## 〔ウェブサイト・オンライン動画〕最終閲覧日はいずれも2024年11月1日

- 一般社団法人やさしい日本語普及連絡会  
<https://www.yasanichi.com/>
- 静岡県 もっと学ぼう！やさしい日本語。実践編  
<https://www.youtube.com/watch?v=Lj9JD24184Q>
- 入管庁「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」  
[https://www.moj.go.jp/isa/support/portal/plainjapanese\\_guideline.html](https://www.moj.go.jp/isa/support/portal/plainjapanese_guideline.html)

『入門・やさしい日本語』認定講師養成講座

<https://yasashii-nihongo-tourism.jp/lecturers.html>

やさしい日本語ツーリズム研究会

<https://yasashii-nihongo-tourism.jp/>

やさしい日本語ツーリズム研究会 ショートムービー「第三者返答」

[https://www.youtube.com/watch?v=56FPX\\_u0Y0g](https://www.youtube.com/watch?v=56FPX_u0Y0g)

やさしい日本語ツーリズム研究会 ショートムービー「第三者返答 カフェ接客シーン」

<https://www.youtube.com/watch?v=4EEYgZ0Norg>

やさしい日本語ツーリズム研究会 ショートムービー「第三者返答 アリスの授業シーン」

[https://youtu.be/EFS\\_PlaDCrA](https://youtu.be/EFS_PlaDCrA)

やさしい日本語ツーリズム研究会 やさしい日本語ラップ「やさしい せかい」

<https://www.youtube.com/watch?v=2fYxhoUwqAg>

弘前大学社会言語研究室 「やさしい日本語」作成のためのガイドライン

[https://www.fdma.go.jp/singi\\_kento/kento/items/kento207\\_20\\_sankou5-6.pdf](https://www.fdma.go.jp/singi_kento/kento/items/kento207_20_sankou5-6.pdf)